

## 久慈市とリトアニア共和国クライペダ市との姉妹交流の20年を振り返って

岩手県久慈市 総務企画部総務課

総括主査 夏井正悟

平成21年(2009年)7月30日から8月3日まで、岩手県久慈市の山内市長を団長とする15名の派遣団が、13年ぶりに姉妹都市であるリトアニア共和国クライペダ市を訪問し、日本舞踊・書道・茶道・華道の日本文化紹介と特産品販売を行い、交流を深めました。

この書き出しでは、どこにでもあるほのぼのとした交流のように思われますが、姉妹都市締結からの20年を振り返ってみると、久慈市とクライペダ市の平和的な交流は、感慨深いものがありました。

久慈市は、岩手県沿岸北部にある人口約4万人の小都市です。ウニ・アワビ・鮭などの海の幸、山菜・キノコなどの山の幸に恵まれ、また、気候は冷涼ではあるものの、積雪は少なく、豊かな自然に恵まれた過ごしやすい地域です。

産業面では、1960年代までは川崎製鉄久慈工場を中心に栄えましたが、工場閉鎖後は新たな産業誘導が大きな地域課題でした。その後、国家地下石油備蓄基地や造船工場等いくつかの誘致企業が立地し、現在でも湾口防波堤や大型港湾の基盤整備が進められています。

このように、典型的な東北地方の小都市ではありますが、「国際交流」に関しては、他の自治体と少し異なった取り組みをしてきたのではないかと考えています。久慈市は二つの姉妹都市提携をしています。一つは、久慈市において社会福祉と教育活動に貢献された故タマシシ・アレン女史の出身地であるアメリカ合衆国インディアナ州フランクリン市(1960年姉妹都市締結)であり、もう一つが、リトアニア共和国クライペダ市(1989年姉妹都市締結)です。

あまり知られてはいなかったものの、久慈市は古くから琥珀の産地でした。ところが、昭和57年(1982年)に久慈琥珀(株)が立地し操業を開始して以来、日本国内では唯一の琥珀の産地として、一躍「琥珀のまち」として内外に知られるようになりました。

これを契機に、琥珀を縁とした新たな姉妹都市の締結先を世界的な琥珀の産地であるバルト海沿岸の都市に求めたのは、昭和62年(1987年)ことでした。その後、関係者の努力により、平成元年(1989年)7月に当時ソビエト連邦内にあったクライペダ市と姉妹都市関係を結びました。

さて、日本におけるリトアニアの知名度は、「命のビザ」として知られる故杉原千畝氏の人道支援によるところが大きいのですが、久慈市とクライペダの関係も、「琥珀」よりも「人道支援」の関係が注目されることになりました。紙幅の都合で詳しくは説明できませんが、1990年以降、リトアニアでは独立運動が盛んになり、ソ連の武力介入が行われるなど、不安定な政情となりました。そのような状況下、クライペダ市は久慈市など姉妹都市に支援要請を行いました。それを受け、久慈市は、様々な葛藤を抱えながら、地方都市としては異例となるゴルバチョフ大統領に対する抗議電文を打つほか、1991年から1992年にかけて医薬品や義援金などの支援を行ったのでした。(注1:この経緯については、黒岩幸子氏の論文に詳しい。)

1991年9月、リトアニアは独立を回復し、苦しい経済状況ではありましたが、平和的な交流がスタ

ートしました。枚挙にはいとまがないのですが、久慈市におけるリトアニア共和国やクライペダ市に関する交流事業は次のとおりです。

リトアニア展（1991年10月）、クライペダ市・米国フランクリン市・久慈市の子どもたちによる「子ども国際交流のつどい」（1992年5月）、長期研修生（注2）の受入れ（1993年11月～1994年11月）、国際琥珀の祭典（1997年7月）、久慈市文化会館アンバーホールでのリトアニア音楽祭（1999年11月）などです。また、久慈琥珀（株）では、琥珀博物館やリトアニア館を開設し、リトアニア共和国との交流を後押ししています。久慈市からも、1989年、1992年、1996年とクライペダ市を訪問し、交流を深めています（注3）。その後しばらくの間、久慈市は合併という行政課題のため、国際交流事業を施策の中心に置くことができなかつたのですが、姉妹都市締結20周年に当たる2009年にクライペダ市において世界的に有名な「The Tall Ship Race Baltic 2009」が開催されることに合わせ、記念調印や文化交流を行おうという両市の気運が高まり、今回の訪問交流活動に結びついたのでした。

現在、昨年の金融危機以降のリトアニアは厳しい経済環境の中にあるといわれています。しかし、かつての独立に際しての激動の時期と比べ、人々の顔は自信に満ちあふれているように伺えました。それは、長い歴史と優れた文化を背景に、現在はEUの一員としてヨーロッパ発展を担っているという自負なのかもしれません。今回、クライペダ市では国際的なイベントである「The Tall Ship Race Baltic 2009」のホスト港を主催し、一日あたり30万人の人出といわれた賑わいを見る限り、近い将来、リトアニアがヨーロッパにおける重要な地位となる可能性を感じました。港湾・河川・市街地・各種施設など、都市の個性と機能を十二分に活用し、歴史的な景観を美しく保ちながら、町を挙げて大規模なイベント運営を行う様子には、多くの学ぶべき点があり、クライペダ市との姉妹都市関係の維持発展は、我々にとって非常に有意義なのだという思いが、日々強くなっています。

このような思いの中、8月19日に姉妹都市締結20周年記念事業として久慈市文化会館で開催したリトアニアの誇るピアノデュオであるルータ&ズビグネヴァスによるピアノコンサートには、多くの市民が訪れ大好評でした。20年の交流の歴史を踏まえ、リトアニアやクライペダ市は遠い東欧にあるのではなく、歴史と文化に満ちたあこがれの地と思う人々が多くなったと感じています。

最後に、クライペダ市との交流の礎を築かれた先人の方々、文化交流にご奮闘いただきました派遣団員をはじめとする関係市民各位、在リトアニア日本大使館、在日リトアニア大使館、外務省、総務省、岩手県、そして、久慈市派遣団を暖かく迎えていただいたクライペダ市と多くの市民ボランティアの方々に、心から感謝を申し上げます。

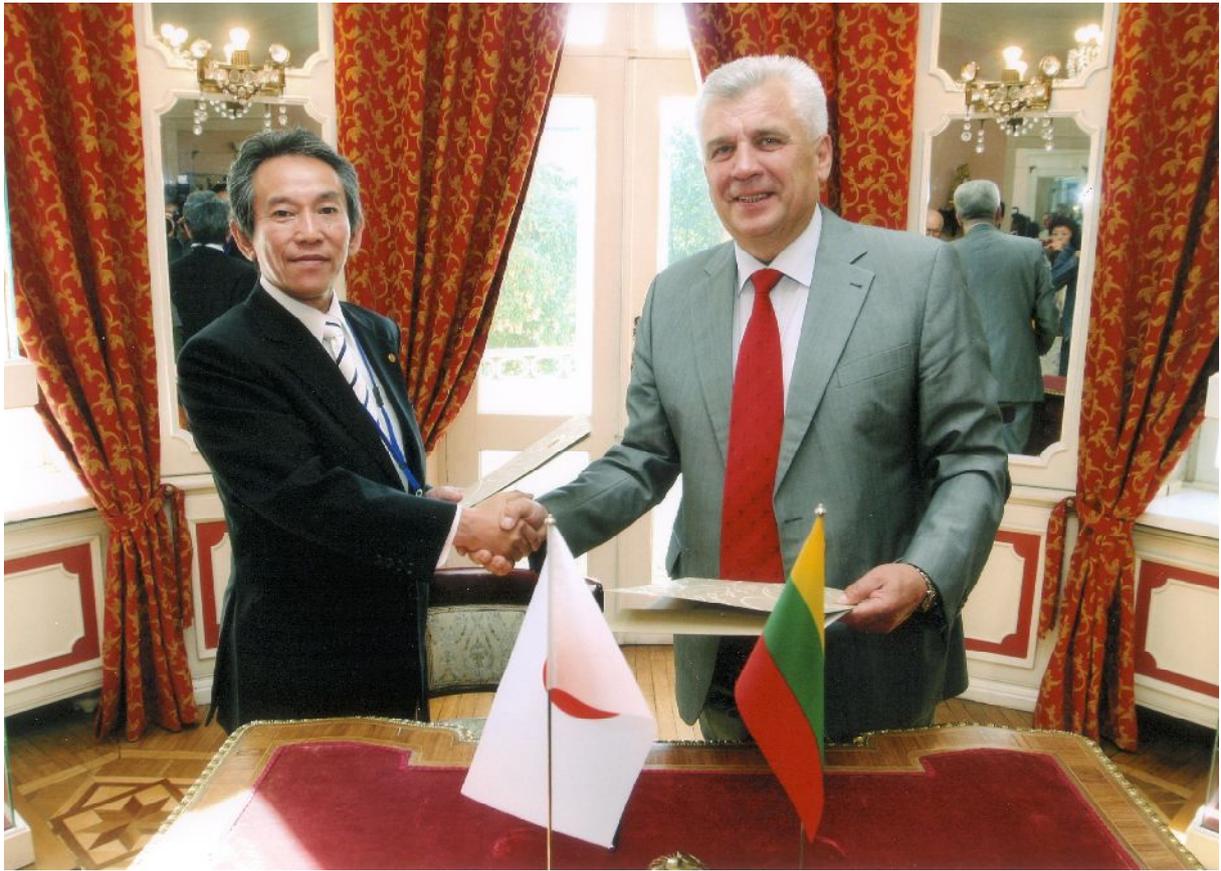
注1：黒岩幸子 「久慈市とクライペダ市の姉妹都市交流自治体～草の根外交の挑戦」

岩手県立大学 総合政策第4巻第2号（2003年）pp.185-pp.197 所収

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110004682621/>

注2：ヴィタウタス・ドムチェス氏は、久慈市で1993年11月から翌年11月まで1年間の研修を行い、現在はクライペダ市で学校長を務める。また、俳句に造詣が深く、リトアニアにおける第一人者として訳書も出版している。

注3：交流実績により、2003年2月にリトアニア共和国から久慈義昭市長（当時）にヴィタウタス大公勲章が授与された。



7/31 姉妹都市締結 20 周年記念調印を交わした山内隆文市長とリマンタス・タラスケヴィシウス市長



8/2 日本文化プログラムのフィナーレ 多くの市民が久慈地方の盆踊り「ナニヤドヤラ」に参加した。

## 久慈市、クライペダ市の姉妹都市交流 20 周年記念事業に参加して

在リトアニア大使館 参事官 関 泉

7月31日、バルト海に面するリトアニアのクライペダにおいて、琥珀を縁として結ばれた岩手県久慈市とクライペダ市の姉妹都市締結20周年を記念し、今後の更なる関係発展に向けた同意書の調印式が久慈市長及びクライペダ市長との間で行われました。今回の記念式典に際し、久慈市より山内市長を団長とする総勢15名の派遣団がリトアニアを訪問しました。派遣団は、記念式典への出席に加え、7月31日、8月1日、2日の3日間に亘り、クライペダ市内の文化施設では派遣団の専門家による日本文化紹介（日本舞踊、書道、茶道、華道）及び久慈市の物産販売を行いました。

今回、在リトアニア日本大使館は久慈市の日本文化紹介グッズ等の受け入れや一部物品の調達に関する御紹介など側面での協力をさせていただきました。また、記念式典には明石大使が出席し、私も、記念式典から日本文化紹介事業の一部に久慈市の皆さんと共に参加させていただきました。

今回の姉妹都市締結20周年記念事業は、これまでの両市の着実な交流の積み重ねが大きく反映された素晴らしい交流事業であったと関係者全員が感じたことと思います。久慈市からの真心のこもったお土産の数々、そして師範の資格をお持ちの専門家による本当に真剣で素晴らしい日本文化紹介、更に、式典等には女性の皆さんが着物を着用されるなど、久慈市派遣団全員の心意気と真心は徹底していました。また、クライペダ市側も、以前、久慈市がクライペダ市一行を受け入れた際に経験した真心こもったもてなしに少しでも報いたいとの誠意と熱意が伝わる歓迎ぶり、記念式典、日本文化紹介、市内視察のいずれの場面でも、久慈市の皆さんとクライペダ市民との間の互いの真心の通じ会う、笑いと喜びに満ちた非常に感動的な交流でした。

明石大使が記念式典における挨拶の中で、「両市の長きに亘る友好関係がリトアニアと日本との間の伝統的な友好関係に大きく貢献してきた」と称えたとおり、正に、両市の交流は日本・リトアニア関係における素晴らしい財産となっています。

20年に亘る両市の交流にあって、今回の20周年記念のような財政的な負担を伴う事業もあれば、地道な交流もあったことと思いますが、今後とも、お金をかけずとも互いの市にとりメリットになるwin-winの友好関係を、関係者の知恵と熱意で更に続けていただくことが息の長い姉妹都市交流の鍵かと思います。大使館として引き続き、お役にたてることがあれば喜んで協力させていただき、All Japanでの二国間関係を更に深めていきたいと思っています。

(平成21年9月「グローバル通信」第9号掲載)